

2023年12月17日降臨節第3主日説教

イザヤ書 65 章 17-25 節

テサロニケの信徒への手紙一 5 章 16-28 節

ヨハネによる福音書 1 章 6-8、19-28 節

本日は、降臨節第3主日です。クリスマスを待ち望む、第3の主日です。午後には、日曜学校ぶどうの木のパージェントもあります。いよいよクリスマスが近づいてまいりました。

さて、本日の旧約聖書は、先週と同じイザヤ書ですが、この箇所には、「見よ、私は新しい天と新しい地を創造する。先にあったことが思い出されることはなく、心に上ることもない」（イザヤ 65：17）という、有名であると同時に、非常に印象深い言葉があります。「新しい天と新しい地」とありますが、最後の方に「狼と小羊は共に草を食み、獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし、私の聖なる山のどこにおいても、これらは危害を加えることも、滅ぼすこともない、――主は言われる」（イザヤ 65：25）ともあります。これらの表現は、明らかに創世記 1 章 30 節などを前提としていると思います。それゆえ、新しい天と地の創造とは、人間にとっては、今までに存在しなかった全く新しい世界の始まりといえるのですが、主なる神さまにとっては、すべてを最初に創造された世界と、すべてが「よし」とされた世界の回復にほかなりません。そのような世界は、残念ながらイザヤ書以後のイスラエルの歴史においても、この世界の歴史においても実現していません。それゆえ、それこそが、21世紀を迎えた現在においても、時空を超えてた、まことの希望に他ならないのです。

本日の使徒書は、テサロニケの信徒への手紙一が選ばれています。この手紙は、「新約聖書」の中で、もっとも古い文章だと言われています。その成立年代は、50年から52年頃といわれていますので、教会という集まりこの地上に存在してから、20年ぐらいたったころに書かれた手紙です。パウロは、この手紙の中で、先にみたイザヤ書の希望、それがイエス様を通して実現すると信じていました。そして、その希望の完成は、近いと予期されていたイエス様の再臨によって起こると考えていました。この手紙には、その期待と、それへの備えが、満ちているのですが、本日の箇所は、その手紙の末尾の部分ですので、ことにパウロによるいろいろな指示と励ましが書かれています。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」（1テサ 5：16-18）とパウロは、終末に向けて、喜び、祈り、感謝することを、それが主なる神さまの意志として求めています。パウロが生きていた1世紀の時代の地中海世界は、ローマ帝国の支配下にありましたが、まだ帝国が安定している状態ではありませんでした。もちろん、帝国が

安定したとしても、それがそこに住むすべての人の幸福を意味するわけではありません。ことにエルサレム神殿のあるユダヤでは、次第に反ローマ帝国に反旗を掲げる機運が高まりつつあり、この手紙が書かれた約20年後には、エルサレム神殿は、ローマとの戦争の中で崩壊してしまうのです。主なる神さまを信じたユダヤ人たちの戦いは、帝国の安定を目指すローマ帝国によって、徹底的に鎮圧されるのでした。それらのことを考えると、この手紙が書かれた時点でも、喜び、祈り、感謝することだけで生きていられる状況ではなかったとも思えます。

パウロは、ユダヤ人でありながらもローマ市民でもありましたので、帝国内では、ある程度恵まれた状態であったかもしれません。しかし、同時に、パウロがまことの希望として信じていたのは、その地上にあるような事柄ではなかったと思います。パウロが、イエス様を通して実現すると予期していた希望について、具体的にどのような情景を想像していたのかを知ることはできませんが、「**預言を軽んじてはいけません**」(1テサ5:20)とも語っていますので、イザヤ書に書かれているような希望、『聖書(旧約)』の中にある事柄と、同じ希望を持っていたといたことは確かでしょう。

さて、本日の福音書は、ヨハネによる福音書にあるバプテスマのヨハネについての物語です。本日の物語において、登場人物たちの会話がかみ合っていない。しかし、これがヨハネによる福音書の特徴の一つです。かみ合わない会話から、大切か何かを示すのです。ここでのバプテスマのヨハネは、自分のことを何であるかを説明しません。「わたしはヨハネです」と名前を答えることも、「こういう目的で洗礼を授けています」とも答えません。それは、自分とは、主なる神様との関係では、「**(神から)遣わされた**」者であり、イエス様との関係においては、その「**後から来られる**」方に代わられる者であると説明するためです。言い換えれば、人間が期待するような事柄を否定し、真に期待すべき事柄を指し示すためです。答えないことで答えるのです。

このバプテスマのヨハネの姿は、クリスマスを迎えようとしている私たちにとって、非常に重要です。わたしたちは、クリスマスに何かを期待するからです。つまり信仰生活における、あるいは日常の生活におけるクリスマスの役割について、何かを期待します。その期待は、さまざまであると思いますが、その期待が実現する喜びもあれば同時に、実現しなかった失望もあるかもしれません。しかし、クリスマスに何かを期待したときに与えられる、まことの喜びとは、わたしたちがクリスマスに向かい合うとき、わたしたちの考えも、期待も、なにかもを超えた、まことの希望の誕生がそこにあるということです。わたしたちは、毎年、そのまことの希望の誕生を、クリスマスを通して示されるのです。それは、イザヤ書が記した希望であり、パウロが確信した希望です。その希望がいつの日か、この地上に実現することを願いつつ、今年もクリスマスを迎えたいと思います。